

海外交流～アラビア語研究最前線～



海外交流

高 階 美 行*

From the Forefront of Arabic Studies

Key Words : Arabic Language, Arabic Studies, Arabic Culture

1. 新シリーズ「〇〇語研究最前線」のスタートに際して

大阪大学の理系分野における研究活動の最前線と生産技術の革新にしのぎを削る現場とをつなぐ本誌のような専門誌に、外国語学部から「海外交流」欄に寄稿を始めたのは、本誌の Vol.60, No.2 (2008 年春号) からである。その前年 2007 (平成 19) 年 10 月にあった大阪大学と大阪外国語大学との統合を踏まえ、本誌編集委員会に大阪大学世界言語研究センター長高橋明教授が参画を求められたことによる。

各専攻語の担当順はランダムではあったが、ついに前号 (Vol.66, No.2) の 2014 年春号に掲載された日本語専攻紹介で、外国語学部の 25 専攻語の教育研究の概要を紹介するシリーズが完結した。季刊誌である性格から全専攻語をカバーするのに 6 年と 1 号分の時間を要したことになる。その間に外国語学部は学部生数が工学部について多いこともあり、今や大学の重要な一部となり文系諸学部とも合い和しつつ、世界の言語文化教育にまい進している。

諸外国の言語文化の研究の奥ゆきと多様性は世界に及ぶがゆえに、外国語学部の研究陣に潜む DNA は外部にはなかなか想像がつかないらしい。たとえば、昨年、トルコ語専攻大澤孝教授によるモンゴル東部での古代トルコ語碑文 (西暦 8 世紀の突厥第二帝国時代) の大発見が報じられたが、なぜトルコ語

の先生がモンゴルなのかとか、現代トルコ語教育がなぜ古代研究と関係があるのかなどの素朴な疑問を耳にした。このような新発見でなくとも、なぜかと問われることは、枚挙にいとまがない。そこで、高橋氏の後に編集委員を引き継ぎ、シリーズ完了後の新タイトル「〇〇語研究最前線」を編集委員会で検討いただいた時に念頭にあった主要なポイントは次の 2 点である。

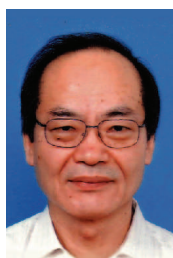
ポイントの第 1 は、学会的には最前線でも新発見ではなく旧聞に属することであっても、一般には理解が浸透せず上記のような質問に接するような事柄について、丁寧に説明することである。一般に理解されきっていないがゆえに是非知って欲しいことを、特にお薦めの「最前線」として紹介するという観点である。

また第 2 は、各専攻語の研究室や執筆者が目下取り組んでいるとか話題となっている内容を「最前線」として基礎から分かりやすく解説するというものである。本誌が得意とする研究と生産の現実上のせめぎ合いについて、諸外国の言語文化研究でも同じであることをご理解願ひ、外国語学部の DNA への認知を広めるとの視点である。

こうした 2 点をゆるやかな枠組みとする新シリーズは、専門やお国事情が非常に多面的であるため、各執筆者にどう受け継がれるか予測は難しいが、読者諸賢とともに、期待に胸を膨らませつつ行く末を見守りたい。

2. 「ゼロ」はアラビア語

さて、新シリーズ初回は中東のアラビア語系諸言語を専門とする私が担当することになった。理工系分野のお方でも意外に関心は広く深く、専門の一部を編集委員会の懇談で説明していた時に、全編古代アラム語のセリフによる映画「パッション Passion」



* Yoshiyuki TAKASHINA

1949年3月生

京都大学大学院 文学研究科博士課程言語学専攻 (単位取得退学) (1976年)

現在、大阪大学名誉教授・外国語学部非常勤講師 文学修士 アラビア語学、セム語学

TEL : 0795-48-2495

FAX : 0795-48-2495

E-mail : takasina@lang.osaka-u.ac.jp

(キリストの受難の意) をご覧になっていて、即座に「イエスが喋っていた言葉ですね。」と言われた時には実に驚いた。しかし、ここに紹介する内容は同様の懇談の中で言及した折には時間足らずでもあったので、新シリーズの第1ポイントとして取り上げたい。まずは、頭の準備体操から。

普通の日本市民は、漢数字とアラビア数字(西洋数字)とローマ数字を知っているが、アラビア数字が明治期に西洋数字として導入されて以来、アラブ世界でも「アラビア数字」を使うと思っている人がいる。アラブ世界の数字は、来源であるインドへの敬意を示すため「インド数字」と呼ばれ、西洋数字とは形が異なる。念のために、本誌(Vol.62 No.2)でアラビア語専攻を紹介した時に掲げた表を再掲する。

アラビア数字	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
(アラブ世界の)										
インド数字	٠	١	٢	٣	٤	٥	٦	٧	٨	٩

似ていないではないかとの感想には、文字を書く現場を想像願いたいと言うほかはない。アラビア文字は右から左に横書きするので、文字を書く時の紙と人との角度は、書きやすいように自ずと右が上に傾きがちとなる。左から行を書き始める西洋語では紙が傾くことは少なく、これらの形を見たとおりに書けば、反時計回りに90度回転してしまう。これは、「アラビア数字」が書かれる現場を西洋人が目撃したことを強く示唆する(補足説明も必要だが、スペースの関係で割愛)。

ちなみにイスラーム文化が栄えた中世のスペインに、当時最先端のアラビア数学を学びに留学してきた西欧の学者なら、形がこうは歪まなかったであろう。アラビア数字による計算方法の最大の利点はゼロの使用による位取り計算である。計算が容易で早くかつ正確である点を考慮すれば、ローマ数字による計算方法は格段に煩雑である。この魔力に衝撃を受けたのは誰か。言うまでもなく、地中海の反対側、イタリアの貿易商たちである。商売敵には教えないアラブ人からイタリアのピサの商人レオナルドがどのように盗み出したかは、ジクリト・フンケ著高尾利数訳『アラビア文化の遺産』(みすず書房、1982年)第2章を参照願いたい。

ゼロにどれだけの威力と秘匿に値する価値を西洋人が見出したかは、「ゼロ zero」という呼称そのものに潜んでいる。英語 canal「運河」と channel「水路、海峡」の関係のような zero の同源語を、IT系の人は必ず知っている。decipher「暗号を解読する」の接頭語 de-を除く cipher「暗号、ゼロ、計算する」はアラビア語 صفر şifr スィフル「空(くう)、ゼロ」の音訳であり、ゼロを解くの意味である。西洋に概念がなかったゼロは、盗んだピサの商人がアラビア語の音をそのまま中世ラテン語で cephirum(セフィル)と書いたため、ドイツ語 Ziffer やフランス語 chiffre にもなった。ところがこれらの語は秘密めいた呪文や暗号の匂いが強くなりすぎ、数学記号の呼称として cephirum > zefero > zero と音が変化していたイタリア語から再び音を借用した結果、イタリア語音が全世界に広まった。それが私たちの「ゼロ」である。

3. 未知数“x”もアラビア語

ゼロは実利に直結するため商人の暗躍で西欧に伝わったが、未知数 x はイスラーム時代のスペインに留学した学者たちが伝えた。代数 algebra がアラビア語 الجبر al-jabr を語源とすることは周知であるが、その特徴は未知数を扱うことである。アラビア数学者たちはこの概念を単純に شيء šay' [ʃajʔ] シャイウ「(ある)もの」と呼んだが、代数に未知数は頻出するので簡便のためにイニシャル1文字 ش [ʃ] シュで表わしていた。留学生たちはこの音 [ʃ] をアルファベットで書きとどめ、x と表記した。現代の英語では x は [ks] climax とか [z] xylophone とか発音するが、当時のイベリア半島では x は [ʃ] と発音されていた。ちなみに当時のアラビア語発音はアルファベットで xei シェイと記録されている(Alcalá による)。

日本にキリスト教を伝えたイエズス会宣教師 Francisco de Xavier は、日本語でザビエルと音訳されているが当時の音は「シャヴィエル」である。日本でも彼にゆかりの深い山口県では今も原音に近く「サビエル」と呼んでいるし、世界史でシャビエルと習った人もいよう。つまり、最先端の学問を学びに来た留学生たちが先生の発音を忠実に音表記した x は、留学生の帰郷後、音の意味が忘れられ、未知数表記の記号としてのみ理解されることになった。

西欧で未知数の不足に直面した時、 x に後続する y や z が選択されたのは自然の流れである。

アラビア数字に「ゼロ」と「未知数 x 」も含めるべきであることは、ご理解願えたであろう。今は混乱を深めるアラブ世界であっても、現今の科学技術の発展におけるこれらの重要性に鑑みれば、アラブ・イスラーム文明の人類への貢献に尊崇の念が自然に湧くであろう。

4. アラブでもムスリムでもない南スーダンの「アラビア語」

新シリーズの第2ポイント、アラビア語研究の最前線の1つは、「ジュバ・アラビア語」Juba Arabicの話である。国連の介在でなんとかアラブ・イスラームのスーダンから独立した南スーダン（首都はナイル川沿いのジュバ）の言語は、奇妙な経緯に包まれている。ナポレオンに勝ちエジプトを事実上支配した英国は、南部のスーダンについても勝手に国境を定めたため有力な民族集団が特になく、布教活動の結果としてキリスト教世界となったが、南部は石油を産する。ハルツームを首都とするスーダン北部との摩擦を生んだが、ジュバは北部からムスリム商人がやってくる交易の中心地として長く平和な町であった。

ムスリム商人とジュバ住民との接触では明らかに前者が上位となり、住民の言語が多様すぎて住民たちはムスリム商人の言語であるスーダンのアラビア語（話し言葉）の模倣を始める。当初は単にベーシックな単語を並べただけで過去や未来の区別もなく「アナタ、ソレ、ウル？ワタシ、カウ。」と言った感じの表現であった（専門的にはピジン pidgin 言語）。やがて語彙数の増加が始まると、異民族間のカップルでは共通言語となり、その子供たちはピジン・アラビア語を母語とするに至る。第二次大戦後もこの言語は広く浸透し、語彙も文法的表現力も格段に増大し（クレオール creole 言語）、現在ではメディアも南スーダン政府も使用し、話者数は100万人をはるかに超えると推定される。卓越した有力言語が存在せず、同規模の民族集団が数多く存在すると共通言語はどうなるかに関して、ジュバは1つの答えを

出した。

1世紀を経ずして特定地域に巨大な言語集団が生まれたことは、先祖伝来の言語から多数が言語を切り替える実験がジュバを実験室として進行中であるという意味である。過去の記録が十分でない言語変化については推測に頼る部分が残らざるを得ないが、ジュバではリアルタイムで進行中であり、多くの研究者が注目している。さらに興味深いのは、時間の経過とともに反目しあう北のハルツームの言語形式が広まる傾向もあり、よりアラビア語らしさを増している点である。これは、7世紀以来のアラビア語域拡大の中で、少数者アラブ人（アラビア半島の人口密度を想起されたい）の言語が広大な地域に広まったプロセスの再現とも言え、少数者の言語が絶対多数者に習得されうること示唆する。

キリスト教社会の南スーダンでは、表記にアラビア文字でなくラテン文字を使用する。掲載の写真はジュバで売られているカセットテープ¹のラベルである。ALLAH TAI「私の神様」を見れば、アラビア語のアッラーがキリスト教でも神を意味しTAIは「私の」(bitā'ī「私の」に由来)であると一目瞭然である。歴史の大きなうねりに対して感慨の念を禁じ得ない。



¹ ジュバ・アラビア語研究の日本における第一人者仲尾周一郎氏（アラビア語専攻出身）からのおみやげ。